

玄奘の年次問題について

吉 村 誠

一、序言

玄奘は唐代のみならず中国の仏教を代表する人物である。西天取經の大旅行を敢行し、大量の仏典を翻譯して、唯識の教義体系を伝播したことで知られている。しかし、その生卒年次や出發年次については、伝記の記述に異同があることから、数々の異説が存在する。¹⁾一般に流布している生卒年次(六〇二—六六四)でさえ、その論拠を明示することは容易ではない。

従来の研究では、伝記を他の史料と対照し、どの説が適切であるかを考察してきた。それでもなお年次問題が完全に解決しないのは、伝記の成立に複雑な問題があるからである。玄奘の伝記のうち基本となるものは、『統高僧伝』卷四玄奘伝(以下、「玄奘伝」と略称する)と、慧立・彦棕『大唐大慈恩寺三藏法師伝』十卷(以下、「慈恩伝」と略称する)

と、冥詳『大唐故三藏玄奘法師行狀』一卷(以下、『行狀』と略称する)の三つである。

道宣 『統高僧伝』卷四玄奘伝 (「玄奘伝」)

慧立・彦棕 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』十卷 (「慈恩伝」)

冥詳 『大唐故三藏玄奘法師行狀』一卷 (「行狀」)

このうち、「玄奘伝」は、道宣が貞觀二十三年(六四九)までに一旦完成したもの(日本古写經に現存。興聖寺本など)を、本人が乾封二年(六六七)年までに増補・改訂し、さらに後人が總章二年(六六九)以後に加筆して現行のもの(高麗本など)になった。²⁾また、『慈恩伝』は、慧立が貞觀二十三年(六四九)までに五卷本(現存せず)を著し、それを彦棕が垂拱四年(六八八)に増補したものが現行の十卷本である。『行狀』は、前半が貞觀年間に成立した「玄奘伝」や『慈恩伝』の記事を抄出・補訂したもので、後半は以後の事

蹟を晩年まで記した最初の通伝である。なお、「玄奘伝」の補訂には『行状』が参照され、『慈恩伝』の増補には『行状』と「玄奘伝」が参照されている。このように、玄奘の主要な伝記は、それぞれ影響を及ぼし合いながら複雑な過程で成立した^③。それぞれの成立年次を整理すると、次のようになるだろう。

- ①道宣 『統高僧伝』 玄奘伝・興聖寺本（「玄奘伝」興本）
六四九年以前成立
- ②慧立 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』五卷（『慈恩伝』五卷本）
六四九年以前成立
- ③冥祥 『大唐故三藏玄奘法師行状』一卷（『行状』）
六六四年以後成立
- ④道宣 『統高僧伝』 玄奘伝・高麗本（「玄奘伝」麗本）
六六九年以後成立
- ⑤慧立・彦倬 『大唐大慈恩寺三藏法師伝』十卷（『慈恩伝』十卷本）
六八八年成立

小稿では、伝記の成立過程を踏まえて玄奘の年次問題を検証し、他の史料も併用して、生卒年次、出発年次、到着年次を推定する。「玄奘伝」は①興聖寺本（以下、興本と略称する）と④高麗本（以下、麗本と略称する）とを区別し、『慈

恩伝』は②慧立の五卷本と⑤彦倬の十卷本とを区別する。これらの区別がない場合は、いずれも後者を指すものとする。

二、生卒年次

1 卒年の年齢

玄奘の卒年は、いずれの伝記も麟徳元年（六六四）であり、異同はない。生年はここから卒年の年齢を減算することで算出できる。しかし、卒年の年齢については、『行状』は六十三歳、『統高僧伝』（麗本）は六十五歳、『慈恩伝』（十卷本）は六十六歳であり、異同がある。

まず、『行状』の記事をあげれば、以下のようである。

麟徳元年正月一日、玉花寺衆及僧等、請翻大宝積經。法師辞曰。「知此經於漢土未有縁。縱翻亦不了」。固請不免。法師曰。「翻必不滿五行」。遂訳四行止。謂弟子及翻經僧等。「有為之法、必歸磨滅。泡幻之質、何得久停。今麟徳元年、吾行年六十有三^④。必卒玉花。若於經論有疑、宜即速問。勿為後悔」。

麟徳元年正月一日、玉花寺の衆及び僧等、『大宝積經』を翻ぜんことを請ふ。法師辞して曰く。「此の經は漢土に於て未だ縁有らざるを知る。縦ひ翻するも亦た了ぜざらん」と。固く請はるるに免れず。法師曰く。「翻ずる

も必ずや五行を満たさざらん」と。遂に四行を訳して止む。弟子及び翻經僧等に謂ふ。「有為の法は、必ず磨滅に帰す。泡幻の質、何ぞ久しく停むることを得ん。今麟徳元年、吾が行年は六十有三なり。必ずや玉花に卒せん。若し經論に於て疑有らば、宜く即ち速かに問ふべし。後悔を為すこと勿れ」と。

これは、玄奘が『大般若經』を訳了した翌年の麟徳元年（六六四）正月一日に、衆僧から『大宝積經』の翻訳を請われるも四行で筆を止め、命終が迫っていることを語る場面である。これに従うならば、玄奘は卒年の麟徳元年（六六四年）に六十三歳であり、ここから逆算すると生年は仁寿二年（六〇二）になる。

次に、「玄奘伝」（麗本）の記事をあげれば、以下のようである。

麟徳元年、告翻經僧及門人曰、「有為之法、必歸磨滅。泡幻形質、何得久停。行年六十五矣。必卒玉華。於經論有疑者、可速問」。

麟徳元年、翻經僧及び門人に告げて曰く、「有為の法は、必ず磨滅に帰す。泡幻形質、何ぞ久しく停むることを得ん。行年六十五なり。必ずや玉華に卒せん。經論に於て疑有る者は、速かに問ふべし」と。

この文章は『行狀』にきわめて類似するため、『行狀』の

玄奘の年次問題について（吉村）

記事を用いないし改變して作られたものと推察される。ただし、年齢は「六十有三」から「六十五」に引き上げられている。これに従うならば、玄奘は卒年の麟徳元年（六六四年）に六十五歳であり、逆算すると生年は開皇二十年（六〇〇）になる。

次に、『慈恩伝』（十卷本）の記事をあげれば、以下のようである。

然法師翻此經、時汲汲然、恒慮無常、謂諸僧曰。「玄奘今年六十有五。必当卒命於此伽藍。經部甚大、每懼不終。努力人加勤懇、勿辞劳苦」。至龍朔三年冬十月二十三日、功畢絶筆。

然も法師此の經を翻ずるに、時に汲汲然として、恒に無常を慮り、諸僧に謂ひて曰く。「玄奘今年六十有五なり。必ず当に命を此の伽藍に卒ふべし。經部甚大なれば、毎に終らざらんことを懼る。努力して人ごとに勤懇を加へ、劳苦を辞すること勿れ」と。龍朔三年冬十月二十三日に至り、功畢り筆を絶つ。

『慈恩伝』（十卷本）では玄奘の年齢を「六十有五」としている。これは「玄奘伝」（麗本）を参照したことを示唆するものである。しかも、これは『大般若經』を翻訳する際に衆僧に精勤をうながす場面であるから、少なくとも龍朔三年（六六三）以前の話であると解さざるを得ない。これに従う

ならば、玄奘は卒年の麟徳元年（六六四年）に六十六歳以上でなければならず、逆算すると生年は開皇十九年（五九九）以前になる。

このように三者を比較すると、臨終時の記事については『行状』が最も古く、これを参照して「玄奘伝」（麗本）が作られ、前二者を参照して『慈恩伝』（十巻本）が作られたことが推知される。反対に、『慈恩伝』の臨終の記事から、「玄奘伝」（麗本）や『行状』の記事が作られたという推測は、前二者の成立年代と、後二者の記事の内容からみて、成立しないであろう。このことから、玄奘の卒年の年齢は、『行状』の六十三歳から、「玄奘伝」（麗本）の六十五歳、『慈恩伝』（十巻本）の六十六歳へと加上されたと見るべきである。

2 受具の年齢

卒年の年齢が六十三歳であることの傍証となるのが、玄奘が具足戒を受けた時の年齢である。『慈恩伝』と『行状』によれば、受具の年次は武徳五年（六二二）、年齢は二十一歳であり、両者に異同はない。

先ず、『慈恩伝』の記事をあげれば、以下のようである。

法師年満二十、即以武徳五年、於成都受具、坐夏学律。五篇七聚之宗、一遍斯得。益部経論研綜既窮、更思入京詢問殊旨。⁸

法師年満二十、即ち武徳五年を以て、成都に於て受具し、坐夏して律を学ぶ。五篇七聚の宗、一遍にして斯に得す。益部の経論は研綜既に窮まり、更に京に入りて殊旨を詢問せんと思ふ。

『慈恩伝』では、玄奘は武徳五年（六二二）に「満二十」で受具したという。満二十歳ということは、数えて二十一歳ということである。この記事は巻一にあることから慧立の五巻本にあったものである。これに従うならば、玄奘は卒年の麟徳元年（六六四年）には六十三歳となり、『行状』の卒年の年齢に一致する。しかし、これは『慈恩伝』（十巻本）の卒年の年齢（六十六歳）とは矛盾することになる。

次に、『行状』の記事をあげれば、次のようである。

法師年二十有一、以武徳五年、於成都受具、坐夏学律。五篇七聚之宗、亦一遍斯得。益部経論研綜既窮、更思入京詢問殊旨。⁹

法師年二十有一、武徳五年を以て、成都に於て受具し、坐夏して律を学ぶ。五篇七聚の宗、亦た一遍にして斯に得す。益部の経論は研綜既に窮まり、更に京に入りて殊旨を詢問せんと思ふ。

この文章は『慈恩伝』のものとほとんど変わらない。受具の記事については『行状』が『慈恩伝』（五巻本）を参照したのであろう。年齢は「満二十」から数えの「二十有一」に

変更されているが、意味は同じである。したがって、『行状』によれば武徳五年（六二二）に二十一歳で受具し、麟徳元年（六六四年）に六十三歳で卒したことになる、両者は完全に一致する。

「玄奘伝」には受具の記事がないが、「武徳五年、二十有一」¹⁰とあり、この点は『慈恩伝』や『行状』と一致する。しかし、これは「玄奘伝」（麗本）の卒年の年齢（六十五歳）とは矛盾することになる。

『行状』の著者は、『慈恩伝』（五卷本）と「玄奘伝」（麗本）を参照して、武徳五年（六二二）に二十一歳で受具したという記事を書いている。卒年の年齢は、そこから計算されたものか、あるいは玄奘から直接聞いたものであろう。いずれにせよ、卒年の年齢については『行状』の麟徳元年（六六四年）六十三歳というのが最も古い記録である。それが諸伝一致する武徳五年（六二二）二十一歳と矛盾しないということとは、この記録が最も理にかなっていることを証明していると言えるだろう。

このことから、玄奘は卒年の麟徳元年（六六四年）に六十三歳であり、そこから逆算すると生年は仁寿二年（六〇二）であると推定される。

三、出発年次

1 伝記の所伝

玄奘の出発年次は、いずれの伝記も貞観三年（六二九）であり、異同はない。しかし、出発時の年齢については、『慈恩伝』が二十六歳、「玄奘伝」と『行状』が二十九歳であり、異同がある。

まず、「玄奘伝」の記事をあげれば、以下のようである。

乃又惟曰。「余周流吳蜀、爰逮趙魏、未及周秦、預有講筵、率皆登踐。已布之言令、雖蘊胸襟、未吐之詞宗、解籤無地。若不輕生殉命、誓往華胥、何能具觀成言、用通神解。一觀明法了義真文、要返東華傳揚聖化、則先賢高勝、豈決疑於彌勒、後進鋒穎、寧輟想於瑜伽耶」。時年二十九也。遂厲然独拳、詣闕陳表、有司不為通引。頓述京臯、広就諸蕃、遍學書語。行坐尋授、數日便通。側席面西、思聞機候。會貞觀三年、時遭霜儉、下勅道俗、逐豐四出。幸因斯際、徑往姑臧、漸至燉煌。¹¹

乃ち又た惟いて曰く、「余吳・蜀を周流し、爰に趙・魏に逮び、末に周・秦に及び、講筵有るに預かり、率ね皆な登踐す。已に之を言令に布き、胸襟に蘊むと雖も、未だ之を詞宗に吐かず、解籤するに地無し。若し生を輕ん

じて命に殉^{した}ひ、誓ひて華胥^{かしよ}に往かざれば、何ぞ能く具さに成言^みを觀^み、用て神解に通ぜんや。一たび明法・了義の真文を觀^み、要^{かなら}ず東華に返りて聖化を伝揚すれば、則ち先賢の高勝、豈に疑を弥勒に決せんとし、後進の鋒穎^{ほうえい}、寧んぞ想を『瑜伽』に輟^{とど}めんとするや」と。時に年二十九なり。遂に厲然^{れいぜん}として独举^{とくこ}し、闕^{けつ}に詣りて表を陳ぶるも、有司通引を為さず。迹を京華^{きやうわ}に頓^{とど}め、広く諸蕃に就きて、遍く書語を学ぶ。行坐尋授して、数日にして便^たに通ず。席を側^{そば}に西に面し、機候を聞かんことを思う。会たま貞觀三年、時に霜^{しも}俊^{しゅん}に遭ひ、勅を道俗に下し、豊を逐ひて四出せしむ。幸ひに斯の際に因りて、徑^{みち}ちに姑臧^{こさ}に往き、漸く敦煌に至る。

すなわち、玄奘は中国各地に諸師を歴訪したが疑問を解くことができず、ついにインドを往還して弥勒の『瑜伽師地論』を將來しようと決意する。この時、二十九歳であつた。出国の許可を得ようとして上表したが取り次いでもらへず、長安で諸国の言語を学びながら出発の機会をうかがつてゐた。たまたま「貞觀三年」に霜害で飢饉となり、食料を求めて移動してよいという勅が下つたため、この機に乗じて姑臧を経て敦煌に至つた、という。「玄奘伝」（麗本）は玄奘が麟徳元年（六六四年）に六十五歳で卒したとするため、かりに貞觀三年（六二九）に三十歳であつたとするならば両者は一

致する。しかし、受具の武徳五年（六二二）に二十一歳であつたという記事とは一致しない。

次に、『慈恩伝』の記事をあげれば、以下のようである。

貞觀三年秋八月、将欲首塗。又求祥瑞、乃夜夢見、大海中有蘇迷盧山。四宝所成、極為嚴麗。意欲登山、而洪濤洶湧、又無船筏。不以為懼、乃決意而入、忽見石蓮華、涌乎波外、忘足而生。却而觀之、隨足而滅。須臾至山下、又峻峭不可上。試踊身自騰、有搏颺颺至、扶而上昇。到山頂、四望廓然、無復擁礙、喜而寤焉。遂即行矣。時年二十六也。⁽¹³⁾

貞觀三年秋八月、将に首塗せんと欲す。又た祥瑞を求むるに、乃ち夜夢に、大海の中に蘇迷盧山有るを見る。四宝の所成にして、極めて嚴麗なり。意に山に登らんと欲するも、而も洪濤洶湧し、又た船筏も無し。以て懼れと為さず、乃ち意を決して入るに、忽ち石の蓮華、波外に涌きて、足に應じて生ずるを見る。却りて之を觀るに、足に隨ひて滅す。須臾にして山下に至るも、又た峻峭にして上るべからず。試みに身を踊らせて自ら騰^あがるに、搏颺^{はつりやう}の颺^{さう}至する有りて、扶^{たす}けられて上昇す。山頂に到るに、四望廓然として、復た擁礙するもの無く、喜びて寤む。遂に即ち行く。時⁽¹³⁾に年二十六なり。

すなわち、「貞觀三年秋八月」、出発にあたり吉兆を求める

と、夢に大海にそびえるスメール山（須弥山）を見た。波から涌き出た蓮華を踏んで山麓に着き、風に身を踊らせて飛び上がり山頂まで昇った。四方の眺めは広く、妨げるものは何もない。喜んで夢から覚め、ついに出發することにした。この時、二十六歳であった、という。しかし、貞観三年（六二九）に二十六歳であったとするのは、『慈恩伝』（五卷本）の武徳五年（六二二）に二十一歳で受具したという記事とも、『慈恩伝』（十卷本）の麟徳元年（六六四年）に六十六歳以上で卒したという計算とも一致しない。

次に、『行状』の記事をあげれば、以下のものである。

貞観三年、将欲首塗。又求祥応、乃夜夢見、大海中有蘇迷盧山。極為麗巖。意欲登山、而洪濤洶湧。不以爲懼、乃決意而入、忽見蓮花、波外涌乎、應足而生。須臾至山、又峻峭不可上。踊身自騰、有搏颺、扶而上昇。至頂、四望廓然、無復擁礙、喜而寤焉。遂即行矣。時年二十九也。¹⁴

貞観三年、将に首塗せんと欲す。又た祥応を求むるに、乃ち夜夢に、大海の中に蘇迷盧山有るを見る。極めて麗巖なり。意に山に登らんと欲するも、而も洪濤洶湧す。以て懼れと為さず、乃ち意を決して入るに、忽ち蓮花、波外に涌きて、足に应じて生ず。須臾にして山に至るも、又た峻峭にして上るべからず。身を踊らせて自ら騰

がるに、搏颺有りて、扶けられて上昇す。頂きに至るに、四望廓然として、復た擁礙するもの無く、喜びて寤む。遂に即ち行く。時に年二十九なり。

これは『慈恩伝』の記事を抄出したものである。出發年次を「貞観三年」とするの、も、『慈恩伝』に倣つたためである。ただし、年齢は二十九歳に引き上げられている。『行状』の著者は、下敷きにした『慈恩伝』（五卷本）の受具と出發の年齢が合わないため、『玄奘伝』（興本）を参照して出發の年齢を改めたということも考えられる。しかし、貞観三年（六二九）に二十九歳であったとしても、『行状』の武徳五年（六二二）二十一歳という記事や、麟徳元年（六六四年）六十三歳という記事とは一致しない。これらの記事と完全に一致するためには、貞観三年（六二九）には二十八歳でなければならぬ。

このように、伝記諸本の出發年次は貞観三年（六二九）で一致するが、出發時の年齢は二十六歳と二十九歳に分かれ、それぞれの伝記で他の記事と矛盾を生じている。

そこで反対に、年齢を基準として前項で推定した生卒年次（六〇二—六六四）を当てはめると、二十六歳であれば貞観元年（六二七）の出發、二十九歳であれば貞観四年（六三〇）の出發ということになる。後者は旅行期間（後述）と矛盾するため検討に値しないが、前者は玄奘の上表文に例が

ある。次にこの上表文について検討することにした。

2 上表文の所伝

道宣の『広弘明集』に、玄奘が太宗に経序を請う上表文「請御製経序表」が収録されている。その冒頭は、以下のようである。

沙門玄奘言。奘以貞觀元年、往遊西域、求如来之秘藏、尋釈迦之遺旨。総獲六百五十七部、並以載於白馬、以貞觀十八年、方還京邑。¹⁵

沙門玄奘言く。奘貞觀元年を以て、往きて西域に遊び、如來の秘藏を求め、釈迦の遺旨を尋ぬ。総じて六百五十七部を獲、並な以て白馬に載せ、貞觀十八年を以て、方に京邑に還る。

すなわち、玄奘は「貞觀元年」に西域に行き、「貞觀十八年」に長安に帰還したという。玄奘が麟徳元年（六六四年）に六十三歳であれば、貞觀元年（六二七）には二十六歳である。これは『慈恩伝』の出発時の年齢と一致する。玄奘が長安に到着したのは貞觀十九年（六四五）正月二十四日であるから、貞觀十八年（六四四）とは合わないが、同年のうちに京畿に入ったという意味に解することもできる。重要なことは、玄奘自身が上表文の中で「貞觀元年」に出発し、「貞觀十八年」に帰還したと述べていることである。

他にも、道宣の『集古今仏道論衡』にある玄奘の小伝には、次のようにある。

以貞觀初入関、住莊嚴寺。学梵書語、不久並通。上表西行、有司不許。因遂間行、遠詣天竺。¹⁶三年方達。

貞觀の初めを以て関に入り、莊嚴寺に住す。梵の書語を学び、久しからずして並に通ず。西行を上表するも、有司許さず。因りて遂に間行し、遠く天竺に詣る。三年にして方に達す。

すなわち、玄奘は「貞觀初」に長安の大莊嚴寺に住し、梵語を学んで西行を上表したが、許可が下りなかったため、秘かにインドへ行き、「三年」にして到達した、という。また、『旧唐書』の玄奘伝には、「貞觀初、随商人、往遊西域（貞觀の初め、商人に随ひ、往きて西域に遊ぶ）」とある。¹⁷これらの「貞觀初」は、必ずしも貞觀初年を意味しているとは限らないが、貞觀元年という意味で読むことがあるため、注意してよい事例である。

それでは、伝記の著者たちが、玄奘が「貞觀三年」に出発したとする根拠はどこにあるのだろうか。それは、玄奘が于闐（ホータン）で製した、太宗に帰国の勅許を請う上表文に由来するものと思われる。

沙門玄奘言。…中略…玄奘往以、仏興西域、遺教東伝、然則勝典雖来、而円宗尚闕、常思訪学、無顧身命。遂以

貞觀三年四月、冒越憲章、私往天竺。踐流沙之漫漫、陟雪嶺之巍巍、鉄門巉峻之塗、熱海波濤之路、始自長安神邑、終于王舍新城。中間所經五万余里、雖風俗千別艱危万重、而憑恃天威所至無鯁。仍蒙厚礼、身不辛苦、心願獲從、遂得觀耆闍崛山、礼菩提之樹。見不見迹、聞未聞經、窮宇宙之靈奇、尽陰陽之化育、宣皇風之德沢、發殊俗之欽思。歴覽周遊一十七載。今已從鉢羅耶伽国、經迦畢試境、越葱嶺、渡波謎羅川、帰還達於于闐¹⁹。沙門玄奘言く。…中略…玄奘往きに、仏の西域に興り、遣教東伝し、然して則ち勝典来ると雖も、而も円宗尚ほ闕くるを以て、常に訪学思ひ、身命を顧る無し。遂に貞觀三年四月を以て、憲章を冒越し、私かに天竺に往く。流沙の漫漫たるを踐み、雪嶺の巍巍たるを陟り、鉄門巉峻の塗、熱海波濤の路、長安の神邑より始めて、王舍の新城に終わる。中間に經る所の五万余里、風俗千別に於て艱危万重なりと雖も、而も天威に憑恃して至る所鯁がる無し。仍りて厚礼を蒙り、身に辛苦せず、心に願の從ふを獲、遂に耆闍崛山を觀、菩提の樹に礼するを得。不見の迹を見、未聞の經を聞き、宇宙の靈奇を窮め、陰陽の化育を尽し、皇風の德沢を宣べ、殊俗の欽思を發す。歴覽周遊すること一十七載。今已に鉢羅耶伽国より、迦畢試の境を經、葱嶺を越え、波謎羅川を渡り、帰還して

玄奘の年次問題について（吉村）

于闐に達す。

すなわち、玄奘は「貞觀三年四月」に秘かにインドへ行き、仏跡を巡礼して、諸国を周遊すること「一十七載」にして于闐に達した、という。これが「貞觀三年」に出発したとする最初の資料であり、伝記の著者たちが根拠にしたものと思われる。ところで、この上表文は、貞觀十九年（六四五）年正月の長安到着から逆算すると、貞觀十八年（六四四）の春には出していなければならぬ。しかし、「貞觀三年四月」から貞觀十八年の春までは十五年しかなく、「一十七載」という旅行期間と一致しない。旅行期間が十七年間であるとすれば、出發は貞觀元年でなければならぬ。

玄奘の旅行期間が十七年間であるということは、『広弘明集』の上表文の旅行期間とも一致するため、これを否定することは難しい¹⁹。それでは、「貞觀三年四月」という年月の方はどうであろうか。改めて上表文を見てみると、先ず「遂に貞觀三年四月を以て、憲章を冒越し、私かに天竺に往く」と述べ、次に長安から新王舍城までの旅に苦難はあったが、太宗の威光により無事に到着することができた、と述べている。すなわち、「貞觀三年四月」は、長安を出発した時期であるのか、インドに到着した時期であるのかが明確ではなく、どちらにも読むことのできる文章である。

玄奘はどうしてこのように曖昧な文章を書いたのであろう

か。先ず、長安を出発した年月を明記すると、国禁を犯して出国した過去が調査され、処罰される可能性があったということが考えられる。また、出発時と帰国時とでは西域の情勢が大きく変わり、唐の範囲を判断することが難しかったからであるとも考えられよう。このような理由から、玄奘は長安や唐を出た年月を明示せず、インドに着いた年月のみを記したのではなからうか。⁽²⁰⁾「貞観三年四月」は旅程や地勢から見て、大雪山（ヒンドウクシユ山脈）を越える時点であったと思われる。しかし、帰国後にこの上表文が知られるようになると、玄奘の意図とは別に「貞観三年」が出発年次とみなされ、「一十七載」という旅行期間とともに普及してしまつたのではなからうか。

このように、玄奘の上表文には出発年次を貞観元年（六二七）とするものと貞観三年（六二九）とするものがあるが、旅行期間との関係を考えるならば、前者の方が蓋然性が高いと言えるだろう。もし貞観元年（六二七）に長安を出発したとするならば、『慈恩伝』が伝える出発時の年齢と一致する。また、前項で推定した生卒年次（六〇二—六六四）とも一致することになる。

このことから、玄奘が長安を出発したのは貞観元年（六二七）⁽²¹⁾秋八月であり、その時の年齢は二十六歳であると推定される。

四、到着年次

1 修学期間による算出

玄奘が目的地である摩揭陀国（マガダ）の那爛陀（ナーランダ）に到着した年次については、いずれの伝記も明記しない。しかし、もし貞観元年（六二七）秋八月に長安を出発したとするならば、貞観二年（六二八）の春には高昌国（トルファン）の麹文泰から供養を受け、夏には凌山（ペダル峠）を越えて突厥の葉護可汗（ヤグブ・カーン）に面会したことになる。また、貞観三年（六二九）夏には大雪山（ヒンドウクシユ山脈）を越え、迦畢試国（カピシー）で「夏坐」⁽²²⁾したことになるだろう。迦畢試国を出ると北インドに入る。したがって、前項で検討した玄奘の上表文に「貞観三年四月」とあるのは、この大雪山を越えてインドに入った年月を指すものと考えられる。

伝記によれば、玄奘は北インドから中インドのナーランダに至るまで、各地に滞在して修学を重ねている。修学状況に詳しい『慈恩伝』の記事によれば、各地の滞在期間は以下のようである。

迦湿弥羅国（カシユミール）

二年⁽²³⁾

磔迦国 (タツカ) 一月²⁴
 至那僕底国 (チーナグプテイ) 十四月²⁵
 闍爛達羅国 (ジャランダラ) 四月²⁶
 宰祿勤那国 (スルグナ) 一冬²⁷ 半春²⁸
 秣底補羅国 (マティプラ) 半春²⁹ 夏³⁰
 羯若鞠闍国 (カーニャクブジャ) 三月

各地の滞在期間の合計は、四年七ヵ月になる。玄奘が北インドに入ったのが貞観三年(六二九)夏四月であるとすれば、ナーランダに到着したのは貞観八年(六三四)頃になるであろう。長安を出発した貞観元年(六二七)秋八月から数えるならば、ナーランダまでの旅行期間は六、七年であったことになる。

2 旅行期間による算出

しかし、玄奘の伝記には、ナーランダまでの旅行期間が三、四年であったことを示唆する話がある。

〔正法蔵戒賢〕問法師。「從何処來」。報曰。「從支那國來。欲依師學『瑜伽論』」。聞已啼泣。…中略…法蔵語曰。「汝可為衆說、我三年前病悩因緣」。覺賢聞已、啼泣捫淚、而說昔緣云。「和上、昔患風病。每發手足拘急、如火燒刀刺之痛。乍發乍息、凡二十余載。去三年前、苦痛

玄奘の年次問題について (吉村)

尤甚。厭惡此身、欲不食取尽。於夜中夢三天人。…中略…金色者自言。『我是曼殊室利菩薩。我等見汝空欲捨身不為利益、故來勸汝。當依我語、顯揚正法』。『瑜伽論』等、遍及未聞。汝身即漸安隱。勿憂不差。有支那國僧。樂通大法、欲就汝學。汝可待教之。法蔵聞已、禮拜報曰。『敬依尊教』。言已不見。自爾已來、和上所苦瘳除。僧衆聞者、莫不稱歎希有。…中略…法蔵又問。「法師、汝在路幾年」。答。「三年」。既与昔夢符同。種種誨喻、令法師歡喜。以申師弟之情、言訖辭出。³⁰

〔正法蔵戒賢〕法師に問ふ。「何れの処より来るや」と。報へて曰く。「支那国より来る。師に依りて『瑜伽論』を學ばんと欲す」と。聞き已りて啼泣す。…中略…法蔵語りて曰く。「汝衆の為に、我が三年前の病悩の因縁を説くべし」と。覺賢聞き已るや、啼泣して涙を捫で、昔の縁を説きて云く。「和上、昔風病を患ふ。発する毎に手足拘急し、火焼刀刺の痛みの如し。乍ち發し乍ち息むこと、凡そ二十余載なり。去ること三年前、苦痛尤も甚し。此の身を厭惡し、食せずして尽を取らんと欲す。夜中に於て三天人を夢みる。…中略…金色の者自ら言く。『我は是れ曼殊室利菩薩なり。我等汝の空しく身を捨てんと欲し利益を為さざるを見て、故らに來りて汝に勸む。當に我が語に依りて、正法『瑜伽論』等を顯揚し、

遍く未聞に及ぼすべし。汝の身は即ち漸く安隱たらん。差えざるを憂ふること勿れ。支那国の僧有り。大法を通じてんことを樂ひ、汝に就きて学ばんと欲す。汝待ちて之れに教ふべし」と。法蔵聞き已り、礼拝して報へて曰く、『^つ敬みて尊教に依らん』と。言ひ已りて見えず。爾れより已来、和上の苦しむ所は瘳除す」と。僧衆の聞く者、希有なりと称歎せざるもの莫し。…中略…法蔵又た問ふ。

「法師、汝路に在りて幾年なるや」と。答ふ。「三年なり」と。既に昔の夢と符同す。種種誨諭して、法師をして歎喜せしむ。以て師弟の情を申べ、言訖りて辞出す。³⁰

すなわち、ナーランダの正法蔵戒賢（シーラバドラ。五二六―六四五）は、玄奘が中国から『瑜伽師地論』を学ぶために来たことを知ると涙を流し、弟子の覚賢に三年前の因縁を語らせた。それによれば、戒賢が三年前に病苦を厭つて滅を取ろうとしたところ、夢に現れた文殊菩薩から、やがて来る中国僧に『瑜伽師地論』を教えるように告げられ、以後病苦がなくなったという。戒賢が「旅に出て何年になりますか」と問うと、玄奘は「三年になります」と答えた。かつての夢告と符合し、師弟はその因縁を喜んだ、という。この話によれば、玄奘のナーランダまでの旅行期間は「三年」ということになる。

「玄奘伝」の同じ記事でも「出三年矣（出づること三年な

り）³¹とし、『行状』では「過三年向欲四年（三年を過ぎて向ふところ四年にならんと欲す）」³²としている。この三、四年という旅行期間は、旅程に照らして妥当なものと言えるであろうか。

玄奘が貞観元年（六二七）秋に長安を出発したとすれば、三年目の貞観四年（六三〇）にはカシユミールでアビダルマを学んでいるはずである。カシユミールでの修学は、貞観三年（六二九）後半から貞観五年（六三一）前半にかけての二年間であつただろう。このカシユミールでの修学を、ナーランダ以後の出来事と見るのは難しい。『慈恩伝』に次のようにあるからである。

其「俱舍」「婆沙」「六足阿毘曇」等、以曾於迦湿弥羅諸国聽訖、至此尋説決疑而已。³³

其の「俱舍」「婆沙」「六足阿毘曇」等は、曾て迦湿弥羅諸国に於て聴き訖るを以て、此に至りては尋説して疑を決するのみ。

すなわち、玄奘はかつてカシユミールで唯識の基礎となるアビダルマを学んでいたので、ナーランダでは疑義をただすのみであつた、というのである。したがって、カシユミールに二年滞在している以上、「三年」でナーランダに着くことは不可能である。

しかし、もしカシユミール以外での修学がナーランダ以後

の出来事であり、玄奘がカシユミールからナールンダへ直行したとするならば、どうであろうか。滞在期間の四年七カ月からカシユミールの二年を除く二年七カ月が減算されるため、貞観五年（六五一）のうちにナールンダに着くことも可能となるであろう。これならば、「三年」には収まらないとしても、『行状』の「過三年向欲四年」という期間には収まることになる。

それでは、往路での修学をナールンダ以後の出来事であるとする証拠はあるのだろうか。第一に、「玄奘伝」（興本）では、この間の修学はほとんど記されておらず、カシユミール（滞在期間不明）とカーニヤクブジャ（三月）での修学に言及するのみである。⁽³⁴⁾これに従うならば、玄奘はカシユミールからナールンダまではほぼ直行したことになるであろう。第二に、玄奘は長安でプラバークラミトラに会い、ナールンダで長老の戒賢が『瑜伽師地論』を講じていることを知っていた可能性⁽³⁵⁾がある。その場合、カシユミール以後の各地にあえて長く滞在し、ナールンダでの修学を遅らせるということは考えにくい。このことから、『慈恩伝』の往路での修学には、ナールンダ以後の出来事が誤って挿入されている可能性が指摘⁽³⁶⁾できる。

ただし、三、四年という旅行期間を確定するためには、戒賢と玄奘の因縁譚のみではなく、それとは別の証拠も必要で

あろう。ここでは、玄奘がナールンダに到着した時期は、『慈恩伝』のように各地で修学したとするならば貞観八年（六三四）頃であり、「玄奘伝」（興本）のようにカシユミールから直行したとするならば貞観五年（六三一）頃の到着であると推定したい。

五、結語

以上、玄奘の伝記と上表文を検証し、生卒年次、出発年次、到着年次を、それぞれ推定した。考察の要点は、以下のようである。

生卒年次については、『行状』の麟徳元年（六六四）に六十三歳に卒したという記事が、卒年を記録した最初のものである。これは、伝記諸本に共通する武徳五年（六二二）に二十一歳で受具したという年次と一致する。これを卒年として生年を逆算するならば、玄奘は仁寿二年（六〇二）に生まれたことになる。

長安を出発した年次については、伝記諸本は共通して貞観三年（六二九）に長安を出発したとするが、それぞれの卒年と出発時の年齢とが矛盾する。また、それらの典拠とみられる玄奘の上表文では、貞観三年に長安を出発したとは明記せず、旅行期間とも矛盾している。他方、別の上表文では貞観

元年（六二七）に長安を出発したとするものがあり、これが『慈恩伝』の出発時の年齢や、旅行期間と一致する。このことから、出発年次は貞観元年であると推定される。

ナールンダに到着した年次については、玄奘が長安を出発した貞観元年（六二七）に、『慈恩伝』が伝える往路の修学期間を加算すると、貞観八年（六三四）頃になる。しかし、『玄奘伝』（興本）が伝えるように、カシュミールからナールンダまで直行したとするならば、到着は貞観五年（六三二）頃になる。

考察の結果を表にすれば、以下のようになるだろう。

仁寿二年	（六〇二）	一歳	洛陽に生まれる。
武徳五年	（六二二）	二十一歳	成都で具足戒を受ける。
貞観元年	（六二七）	二十六歳	秋八月一日、長安を出発。
貞観三年	（六二九）	二十八歳	春四月、ヒンドウークシュ山脈を越え、北インドに到着。
貞観五年	（六三一）	三十歳	ナールンダに到着（カシュミールから直行した場合）。
貞観八年	（六三四）	三十三歳	ナールンダに到着（北・中インド各地で修学した場合）。
貞観十八年	（六四四）	四十三歳	春、コータンから上表。

貞観十九年（六五四） 四十四歳 春正月二十四日、長安に帰還。
 麟徳元年（六六四） 六十三歳 春二月五日、玉華寺にて卒す。

これによれば、長安を起点・終点とした旅行期間は約十七年六ヶ月となる。

小稿では伝記と上表文を根拠として玄奘の年次問題を考察したが、この結果を他の史料と比較考量するならば、さらに正確な年次を推定することができようであろう。付録としてこの考察結果を反映した玄奘の略年譜をあげておく。ただし、出発以前やインド滞在中の年次については検討を要する箇所が少なくない。これらの問題については後考を期したい。

註

- （一）玄奘の年次問題に関する主な先行研究には、梁啓超『中国歴史研究法』（一九二二年）一二五頁以下、松本文三郎『玄奘の研究』（『東洋文化の研究』岩波書店、一九二六年）、劉汝霖『唐玄奘法師年譜』（『北京女師大學術季刊』一一三、一九三〇年。二一、一九三一年）、高田修「大唐大慈恩寺三藏法師伝解題」（『国訳一切経 和漢撰述部 史伝部一一』大東出版社、一九四〇年）、「玄奘三蔵入竺行程の検討」（『宗教研究』一〇五、一九

四〇年)、水谷真成『大唐西域記』解説』(中国古典文学大系二二 大唐西域記) 平凡社、一九七一年。後に東洋文庫、一九九九年)、長澤和俊「解題玄奘三蔵略伝」(『玄奘三蔵―西域・インド紀行―』桃源社、一九七八年)、桑山正進「玄奘三蔵の形而下」(『人物中国の仏教 玄奘』大蔵出版、一九八一年)、「インドへの道―玄奘とブラバール・カラミトラ―」(『東方学報』五五、一九八三) などがある。

水谷氏は玄奘の年次については数種の説があるが、問題については大別すると三説あると言う。

第一は、諸伝一致する武徳五年(六二二)に受具したことを根拠として生卒年次を六〇二―六六四年とし、やはり諸伝一致する貞観三年(六二九)に長安を出発したとする説。

仁寿二年 (六〇二) 一歳 生誕

貞観三年 (六二九) 二十八歳 出発

貞観十九年 (六四五) 四十四歳 帰国

麟徳元年 (六六四) 六十三歳 遷化

第二は、『続高僧伝』に「麟徳元年…中略…行年六十五」(大正五〇、四五八a)とあるのを根拠として生卒年次を六〇〇―六六四年とする説。

開皇二十年 (六〇〇) 一歳 生誕

貞観三年 (六二九) 三十歳 出発

貞観十九年 (六四五) 四十六歳 帰国

玄奘の年次問題について (吉村)

麟徳元年 (六六四) 六十五歳 遷化

第三は、『慈恩伝』に長安を出発した時に「年二十六也」(大正五〇、二二二c)とあるのを根拠として貞観元年(六二七)に出発したとする説。

仁寿二年 (六〇二) 一歳 生誕

貞観元年 (六二七) 二十六歳 出発

貞観十九年 (六四五) 四十四歳 帰国

麟徳元年 (六六四) 六十三歳 遷化

第一は松本氏に代表される説であり、水谷氏や長澤氏が支持している。第三は梁氏や劉氏に代表される説であり、桑山氏も別の根拠から貞観元年ないし二年に出発したとする(註21参照)。高田氏は第一から第三に改めている。

(2) 貞観年間に成立した『続高僧伝』は日本古写経に現存し、興聖寺本・金剛寺本・七寺本など複数の種類がある。それぞれ保存状況については、国際仏教学大学院大学の日本古写経データベースで公表されている。

『続高僧伝』巻四については、写経諸本と現行諸本との間に顕著な違いがある。現行諸本は玄奘伝・那提伝・論(訳経篇)で構成されているが、古写経諸本には那提伝がない。また、玄奘伝も貞観二十三年の記事で終了し、記事の配列や内容が現行本と異なるところがある。刊本および写本の諸本の比較研究については、藤善真澄『続高僧伝』玄奘伝の成立―新発見の興聖寺

本をめぐって」（『鷹陵史学』五、一九七九）、伊吹敦「『統高僧伝』の増広に関する研究」（『東洋の思想と宗教』七、一九九〇年）、藤善眞澄「『統高僧伝』管見——興聖寺本を中心に——」（『道宣伝の研究』京都大学学術出版会、二〇〇二年）、Saitō Tatsuya「Features of the Kongō-ji version of the Further Biographies of Eminent Monks: With a Focus on the Biography of Xuanzang in the Fourth Fascicle」（『国際仏教学大学院大学研究紀要』一六、二〇一二年）池麗梅「『統高僧伝』研究序説——刊本大藏経本を中心として——」（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』一八、二〇一三）、『日本古写経善本叢刊第八輯 高僧伝・統高僧伝』（国際仏教学大学院大学日本古写経研究所、二〇一四年）参照。

『統高僧伝』巻四は、興聖寺本が翻刻されている。藤善前掲論文および前掲書、吉村誠「興聖寺本『統高僧伝』巻四玄奘伝——翻刻と校訂——」（駒澤大学仏教学部論集）四四、二〇一三年）参照。Saitō前掲論文は興聖寺本よりも金剛寺本のほうが古い形態であることを指摘するが、写経諸本の異同は年次問題の考察に影響しないため、小稿では全文が翻刻されている興聖寺本を使用する。

（3）『統高僧伝』巻四玄奘伝、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』、『大唐故三藏玄奘法師行状』の三者がそれぞれ影響を及ぼし合いながら成立した過程については、吉村誠「『大唐大慈恩寺三藏法師伝』の成立について」（『仏教学』三七、一九九五年）参照。

（4）『行状』大正五〇、二一九a。「縁」、原本は「緑」。文義により改める。

（5）『統高僧伝』巻四、大正五〇、四五八a。

（6）『慈恩伝』巻十、大正五〇、二四六b。

（7）玄奘自身も、顕慶四年（六五九年）の上表文で「行年六十」（大正五二、八二六b）といいながら、龍朔三年（六六三）の上表文では「年垂七十」（同上）といい、年齢を多く見積もっている。

（8）『慈恩伝』巻一、大正五〇、二二二b。

（9）『行状』大正五〇、二二四b。「成」、原本は「城」。文義により改める。

（10）『統高僧伝』巻四、大正五〇、四四七a。

（11）『統高僧伝』巻四、大正五〇、四四七b。

（12）『慈恩伝』巻一、大正五〇、二二二c。「搏廳」、原本は「搏廳」に作る。『行状』により改める。

（13）『慈恩伝』が出發の時期を「秋八月」とするのは、『大唐西域記』の弁機の讀にある「仲秋朔旦」（大正五一、九四六b）を参照したものと思われるが、「玄奘伝」の「霜儉」（大正五〇、四四七b）の時期とも矛盾しない。「秋八月」に出發したというのは、玄奘周辺の共通認識であったのだろう。

（14）『行状』大正五〇、二二四b。「洵」、原文は「泓」に作る。『慈恩伝』により改める。「涌」、原本は「踊」に作る。文義によ

り改める。

(15) 『広弘明集』巻二二、大正五二、二五八a。

(16) 『集古今佛道論衡』巻丙、大正五二、三八七b。

(17) 『旧唐書』巻一九一、玄奘伝。

(18) 『慈恩伝』巻五、大正五〇、二五一c。「謎」、原文は「讎」に作る。文義により改める。

(19) 太宗「聖教序」や高宗「述聖記」にも「十有七」（大正五〇、二五六a。二五七b）とあり、『慈恩伝』の彦序にも「二十七年」（大正五〇、二二一a）と記されている。

(20) 桑山氏は前掲論文「玄奘三蔵の形而下」で、玄奘の二つの上表文の違いについて、「この二文は貞観元年を長安に実際に出発した年次、貞観三年をインドに到達した年次と考えればちつとも矛盾はない」（八一頁）と述べている。また、同氏は貞観元年から二年までの事情を明示しない理由について、「彼がひそかに出国した事情もさることながら、帰国時点における太宗の西域経営の積極性とこれに対する玄奘の遠慮があったからである」（八二頁）と述べている。

(21) 出発年次に関する諸説については、桑山氏の前掲論文「玄奘三蔵の形而下」五八—八二頁に詳説されている。なかでも玄奘が面会した突厥の葉護可汗が貞観二年（六二八）九月までに没しているという事実は重要である。旅程を逆算すると、玄奘は貞観元年から貞観二年の年初までに長安を出発しなければ、八

玄奘の年次問題について（吉村）

月末までに葉護可汗と会うことはできない。このことから、桑山氏は長安を出発したのは貞観元年か二年初めに長安を出発した可能性が高いとする。

(22) 『慈恩伝』巻二、大正五〇、二二九a

(23) 『慈恩伝』巻二、大正五〇、二二二c。

(24) 『慈恩伝』巻二、大正五〇、二二二a。

(25) 『慈恩伝』巻二、大正五〇、二二二a。

(26) 『慈恩伝』巻二、大正五〇、二二二b。

(27) 『慈恩伝』巻二、大正五〇、二二二c。

(28) 『慈恩伝』巻二、大正五〇、二二三a。

(29) 『慈恩伝』巻二、大正五〇、二二三b。

(30) 『慈恩伝』巻三、大正五〇、二三六c—二三七a

(31) 『続高僧伝』巻四、大正五〇、四五二a。

(32) 『行状』大正五〇、二一六b。

(33) 『慈恩伝』巻三、大正五〇、二三九a。

(34) 吉村前掲論文「興聖寺本『続高僧伝』巻四玄奘伝—翻刻と校訂—」一九六—一九七頁参照。

(35) 玄奘とプラバーカラミトラが会っていた可能性については、前掲桑山論文「玄奘三蔵の形而下」、「インドへの道—玄奘とプラバーカラミトラ—」参照。

(36) 長澤和俊『新考玄奘三蔵の旅』（佼成出版、一九八七年）八九—九二頁では、『慈恩伝』は玄奘の旅日記を参照しつつも、概

ね（相対位置的に整理してある）『西域記』の国順を踏襲したので、実際の旅行とは異なっている」とみて、北インドから中インドまでを『行状』のように直行し、長安から三年ないし四年で摩揭陀国に到着したのではないかと推測する。長澤氏は玄奘の長安出発を貞観三年（六二九）とみるため、摩揭陀国に到着したのは貞観七年（六三三）暮までとみる。しかし、『行状』の前半部分は『慈恩伝』から抄出したものであり、修学内容も『慈恩伝』とほとんど同じである。したがって『行状』は旅程を推測する根拠にはなりえない。ただし、玄奘が北インドから中インドまで直行したとする説は、検討に値するようと思われる。

【付録】玄奘三蔵略年譜

隋・仁壽	二年（六〇二）	一歳	洛陽南郊の陳留に生まれる。俗名は陳禕。
大業	八年（六一二）	十一歳	このころ出家して、洛陽の浄土寺に住む。
大業	十年（六一四）	十三歳	このころ得度する。『涅槃経』『撰大乘論』を学ぶ。
唐・武徳	元年（六一八）	十七歳	隋末の戦乱を避け、長安を経て、成都に到着。道基等に『撰大乘論』『阿毘曇論』を学ぶ。後に空慧寺に住する。
武徳	五年（六二二）	二十一歳	成都で具足戒を受ける。荊州で『撰大乘論』『阿毘曇論』を講じる。
武徳	六年（六二三）	二十二歳	中国各地で修学する。
			相州で慧休に『雑心論』等を八カ月学ぶ。
			趙州で道深に『成実論』を十カ月学ぶ。
			長安で道岳に『俱舍論』を学ぶ。
武徳	七年（六二四）	二十三歳	このころ長安で修学する。道岳に『俱舍論』を学ぶ。蕭瑀の上奏により莊嚴寺に住する。
			西天取経を上奏するも許されず。
貞観	元年（六二七）	二十六歳	八月、『瑜伽師地論』を求めてインドへ旅立つ。タクラマカン砂漠を渡り、高昌国（トルファン）に到着。趙文泰の供養を受ける。
貞観	二年（六二八）	二十七歳	突厥のヤグブ・カーンの供養を受け、『仁王経』を講じる。
貞観	三年（六二九）	二十八歳	バルフでプラジュニヤールカラに『毘婆沙論』を一カ月学ぶ。ヒンドウークシユ山脈を越え、カピシーを経て、カシユミールに到着。説一切有部の僧称に『俱舍論』『順正理論』を学び、二年滞在する。
貞観	五年（六三一）	三十歳	北・南インドの各地で修学する（ナールンダ以後に修学した可能性もある）。 タツカでバラモンに『百論』『広百論』を一カ月学ぶ。

チーナブクティで調伏光に『対法論』『顯宗論』『理門論』を十四カ月学ぶ。

ジャーランダラで月冑に説一切有部の『衆事分毘婆沙論』を四カ月学ぶ。

シウルグナでジャヤグプタに經量部の『毘婆沙論』を四、五カ月学ぶ。

マティプラでミトラセーナに説一切有部の『弁真論』を四、五カ月学ぶ。

カーニヤグブジャでヴィールヤセーナに日冑の『毘婆沙論』と仏使の『毘婆沙論』を三カ月学ぶ。

貞観 八年（六三四） 三十三歳

ナーランダに到着（カシユミールから直行して六三一年頃に到着した可能性もある）。
瑜伽行派の戒賢に『瑜伽師地論』を学ぶ。また『順正理論』『顯揚聖教論』『大乘阿毘達摩集論』『中論』『百論』『集量論』等を学び、五年滞在する。

貞観 十三年（六三九） 三十八歳

このころ東・南・西インドの各地で修学する。

イーリナパルヴァタで如来密・獅子忍に説一切有部の『毘婆沙論』『順正理論』を一年学ぶ。

ダクシナコーサラでバラモンに『集量論』を一カ月学ぶ。

ダーニヤカタカでスプーティ・スールヤに大衆部の『根本阿毘達磨論』を数カ月学ぶ。

パルヴァタで二、三の大徳に正量部の『根本阿毘達磨論』『弁正法論』『教実論』を二年学ぶ。

貞観 十五年（六四一） 四十歳

このころナーランダに戻り、マガダ各地で修学する。ナーランダで『撰大乘論』『唯識決択論』を講じる。『云宗論』三千頌、『破惡見論』一千六百頌を著す。

プラジュニャーパドラに説一切有部の三蔵を二カ月学ぶ。

勝軍に『唯識決択論』『莊嚴經論』等を二年学ぶ。

貞観 十七年（六四三） 四十二歳

カーマルーパでクマール王に供養される。『三身論』三百頌を著す。カーニヤグブジャでハルシャ王が開催した大法会で論主となり、小乗・外道との論争に勝利する。プラ

貞観 十八年（六四四） 四十三歳

ヤーガでハルシヤ王の無遮大会に参加し、帰国の途につく。
パミール高原を越え、カシユガルを経て、于闐（ホータン）に到着。太宗に上表して、
帰国の勅許を請う。

貞観 十九年（六四五） 四十四歳

正月、長安に到着。旅行期間、十七年六ヵ月。仏舍利一五〇粒、仏像七軀、經論六五七部を将来する。二月、洛陽宮の儀鸞殿で太宗と会见し、翻譯の勅許を得る。三月、長安の弘福寺に住する。六月、全国から翻譯大徳が至り、翻譯を開始する。

貞観 二十年（六四六） 四十五歳

貞観 二十二年（六四八） 四十七歳

七月、新訳經論五部と『大唐西域記』一二卷を太宗に進め、經序を請う。
五月、『瑜伽師地論』一〇〇卷を訳了する。『唯識三十頌』一卷を翻譯する。六月、玉華宮で太宗と会见し、『瑜伽師地論』を進める。重ねて經序を請う。太宗「大唐三藏聖經序」を製し、勅して新訳經論を全国に頒布させる。皇太子「述聖記」を製する。十月、太宗に陪從して長安に帰り、紫微殿弘法院に住して『撰大乘論』三卷等を翻譯する。十一月、皇太子、大慈恩寺を建立する。勅により上座となり、大慈恩寺翻經院に住する。

貞観二十三年（六四九） 四十八歳

四月、太宗に陪從して翠微宮に入る。五月、『般若心經』一卷を翻譯する。太宗崩御。高宗即位。大慈恩寺に帰る。十一月、『仏地經論』七卷を訳了する。このころ、慧立の『大唐大慈恩寺三藏法師伝』（五卷本）、道宣の『統高僧伝』（日本古写經本）巻四玄奘伝が成立する。

永徽 元年（六五〇） 四十九歳

一月、『称讚淨土仏撰受經』一卷を翻譯する。五月、『薬師瑠璃光本願功德經』一卷を翻譯する。

永徽 二年（六五一） 五十歳

正月、朝臣に菩薩戒を授け、菩薩行法を説く。六月、『大乘大集地藏十輪經』一〇卷を訳了する。

永徽 三年（六五二） 五十一歳

三月、大慈恩寺に仏塔（大雁塔）を建立。請来した仏舍利・仏像・經論を安置し、褚遂良筆の「聖教序」「述聖記」の二碑を立てる。五月、ナールランダの智光・慧天より手書

と贈物が届く。

永徽 四年（六五三） 五十二歳

永徽 五年（六五四） 五十三歳

永徽 六年（六五五） 五十四歳

顯慶 元年（六五六） 五十五歳

顯慶 二年（六五七） 五十六歳

顯慶 三年（六五八） 五十七歳

顯慶 四年（六五九） 五十八歳

顯慶 五年（六六〇） 五十九歳

龍朔 三年（六六三） 六十二歳

麟徳 元年（六六四） 六十三歳

日本の道昭、入唐して玄奘に学ぶ。

七月、『俱舍論』三〇巻を訳了する。

十月、高宗、武照（後の則天武后）を立后する。新訳の『因明入正理論』等をめぐる論争が生じ、勅により呂才をと対定して論破する。

正月、朝臣による訳経の賛助閲覧と、高宗自作の碑文を請う。二月、尼僧衆に菩薩戒を授ける。三月、『十二面神呪心經』一卷を翻訳する。高宗自書の碑文を請う。四月、大慈恩寺に御製の碑が立てられる。五月、旧疾を患い危篤に陥るも回復する。十月、皇后の安産を祈り、その子の出家を許される。十一月、皇子（後の中宗）誕生し、仏光王と号す。十二月、仏光王を剃髪する。このころ、大乗基（窺基）訳場に列する。

二月、高宗に陪従して洛陽の積翠宮に入る。四月、高宗に陪従して明徳宮に入る。五月、積翠宮に戻り翻訳することを許され、『発智論』『毘婆沙論』を翻訳する。このころ故郷の陳留に帰り父母の墓を訪ねて改葬する。九月、少林寺で翻訳に専念することを請うも許されず。十一月、再び病むも回復する。

正月、高宗に陪従して長安に帰る。七月、勅により西明寺の上座となる。日本の智通・智達、入唐して玄奘に学ぶ。

七月、『毘婆沙論』二〇〇巻を訳了する。十月、玉華宮（後の玉華寺）で翻訳に専念することを請い許される。閏十月、『成唯識論』一〇巻を翻訳する。

正月、『大般若経』の翻訳を開始する。

十月、『大般若経』六〇〇巻を訳了する。

一月、僧衆に『大宝積経』の翻訳を請われるも辞し、翻訳を終了する。翻訳期間、十八年六ヵ月。翻訳総数、七五部一三三五巻（『大唐西域記』を除く）。二月五日、示寂。四

総章 二年（六六九）

永淳 元年（六八二）

垂拱 四年（六八八）

万歲通天元年（六九六）

長安 三年（七〇三）

開元 二年（七一四）

開元 五年（七二七）

開元 十一年（七三三）

至德元年（七五六）—上元三年（七六二）

太和 二年（八二八）

開成 四年（八三九）

宋・天聖 五年（一〇二七）

明・洪武 十九年（一三八六）

中華民國二十九年（一九四二）

三十一年（一九四四）

月十五日、長安東郊の白鹿原に埋葬、白塔が建立される。

四月八日、長安南郊の樊川に改葬、塔宇が建立される（後の興教寺）。これ以後、冥祥の『大唐故三藏法師行狀』、後人補筆の『続高僧伝』（高麗本）巻四玄奘伝が成立する。

十一月十三日、大乗基（基窺。慈恩大師。六三二）示寂。

彦悰、慧立の五卷本を補筆し、『大慈恩寺三藏法師伝』十巻が成立する。

円測（西明大師。六一三）示寂。

日本の智鳳・智鸞・智雄、入唐して智周に学ぶ。

慧沼（淄州大師。六四八）示寂。

日本の玄昉、入唐して智周に学ぶ。

智周（撲揚大師。六六八）示寂。

興教寺の墓塔を改修し、五層の塼塔を建立する。

興教寺の墓塔に「大唐三藏大遍覺法師塔銘并序」が嵌入される。

可政、長安で玄奘の頂骨を得て、建康（南京）の天禧寺の東丘に埋葬する。

黄福灯、玄奘の頂骨を天禧寺の南丘に改葬する。

日本軍、南京中華門外で玄奘の頂骨が入った石棺を発見する。

南京の玄武山（九華山）に玄奘塔を再建し、頂骨を奉安する。頂骨の一部は北京・天津・四川・広州・日本に分骨される。